

- ① 《特集》 人の福祉・動物の福祉 丸ごと取り組む市民活動の現在地
- ⑪ 《うおろ君の気にな～るゼミナール》
「スラップ訴訟」って？
小川 隆太郎（国際人権NGOヒューマンライツ・ナウ 事務局長、弁護士）
- ⑫ 《実録・市民活動「私のいちばん長い日」》
災害ボランティア活動の中間支援
～醍醐味のあとの忘れられない一日～
渋谷 篤男（日本福祉大学福祉経営学部（通信教育）教授、日本社会事業大学専門職大学院客員教授）
- ⑬ 《北海道胆振東部地震災害 厚真発～現地から伝える「被災地の今」》
災害ボラセン経験と看護師視点を
生かした地域づくり
石黒 建一（社会福祉士事務所うららと ソーシャルワーカー）
- ⑭ 《V時評》
1. 「戦争体験」から考える平和への王道
2. 「NPOの概念」をアップデートする
- ⑯ 《NPOのためのほっこり法律相談》 **新コーナー**
遺贈寄付を受けるために気をつけること
樽本 哲（弁護士、一般社団法人全国レガシーギフト協会 共同代表）
- ⑱ 《現場は語る～コーディネートの現場から》
ゆるく、つながりたいを受け止め、活動へ
つなぐボランティアサークル「ゆるボラ」
市居 利絵（大阪ボランティア協会 ボランティアコーディネーター）
- ⑳ 《言葉 Part3 歴史の中のボランティアズム》
科学の政治的意味についても発言していかないと
いけないと思う。（ライナス・ポーリング）
- ㉑ 《U35》
宮村 暢子さん（Gueneu（ゲヌ）代表）
- ㉒ 《この人に》
松村 圭一郎さん（文化人類学者）
- ㉓ 《アゴラ／シネマ／ライブラリー》
カフェ・カワセミピレット／
『いまはむかし 一父・ジャワ・幻のフィルム』／書籍紹介
- ㉔ 《傍聴カフェ～裁判からみえる社会》 **最終回**
番外編 「社会的孤立と犯罪（後編）」



じぶんの町を良くするしくみ

赤い羽根共同募金

共同募金は、地域をつくる市民を応援していきます。

例えば……

地域で、子育てのお手伝いをしたり、
悩んでいるお母さん、お父さんの
相談にのる活動や、障がいのある人が、まちで幸せに暮らせ
るお手伝いをする活動や、地域で、1人暮らしや寝たきりの高齢者
に、栄養の整った食事を届ける活動や、地域に住むみんなが「安心・安全」に
暮らすための活動や、

地域のいろいろな活動のために役立てられます。

- 新型コロナの影響で人と人が距離を取り、つながることが難しい状況ですが、つながることをあきらめず、孤立孤独の問題に取り組むことがこれからのwithコロナの社会づくりに大切です。今年度は中央共同募金会の全国共通助成テーマである「つながりをたやさない社会づくり～あなたは一人じゃない～」に重点を置き、withコロナ、ポストコロナに向けた社会づくりへの支援など先進的な事業を『重点助成テーマ』として福祉活動の支援を行ってまいります。
- 国内で大きな災害が発生した時は、共同募金は都道府県域を超えて、被災地で被災した人々を助ける活動の支援も行います。
- 寄付金には、税の特典があります。会社など法人の寄付金は、全額損金算入できます。個人の寄付金は、所得税の所得控除または税額控除、住民税の税額控除の対象になります。

※赤い羽根共同募金会では、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、日常生活に困難を抱える子どもと家族をめぐる生活課題をはじめ、さまざまな福祉課題に対する取り組みを実施している団体・グループの活動を支援・助成するため福祉活動応援全国キャンペーンを行っています。

赤い羽根おおさか

www.akaihane-osaka.or.jp/

募金の使いみちはすべて、ホームページに掲載されています。

特集

人の福祉・ 動物の福祉

丸ごと取り組む市民活動の現在地

今や、ペットとして飼われている犬や猫の数は15歳未満の子どもの数を大幅に上回っている。

ペットをめぐる市民活動として従来「殺処分ゼロ」を目指す活動などが多く見られてきたが、近年、要支援高齢者とペットをめぐる課題が顕在化し、介護現場や市民活動団体の中で対応に苦慮するケースも増えている。それに対して、実効性のあるネットワーク構築や取り組みは追いついていない。

本特集では、その現状を概観し、動物愛護活動と福祉の連携、課題などを整理する。

【特集チーム】

磯辺康子、筒井のり子、永井美佳、
華房ひろ子、増田宏幸、百瀬真友美



高齢者支援の現場から ペットをめぐるケアマネジャーの葛藤

ここ数年、地域で暮らす高齢者を支援する現場で、ペットがらみでの対応の悩みが増えている。地域包括支援センター、居宅介護支援事業所、訪問介護事業所、社会福祉協議会（以下、社協）などで、この問題に直面したことがないというところはおそらくないだろう。

高齢者支援の現場で何が起きているのか、福祉専門職はこの問題をどのように捉えているのだろうか。

今回、ある自治体の介護支援専門員（ケアマネジャー）組織の代表者に、高齢者支援とペットをめぐる具体的な事例についてお話をうかがった。

――まず、「ご自身がこれまでに対応されたケースを紹介してください。

認知症初期集中支援チーム（注）から依頼があり、要介護の夫と認知症の妻の2人暮らしのお宅を訪問したところ、飼っている猫4匹の世話ができない状態になってい

るケースがありました。カーペットはグチョグチョにぬれており、猫のおしっこか利用者のおしっこかわからない状態。替えの靴下を持って訪問していましたね。

食事は宅配弁当を契約されていましたが。でも猫の餌を買いに行けないので、自分たちの弁当の一部を床にポトンと落として食べさせている状況でした。

支援チームは介護保険制度にながると関わりを終わってしまうので、1人で悩みました。訪問看護は入ってもらえず、ヘルパーもすぐには無理でした。本当は良くないのですが、掃除もしました。利用者の健康や快適な生活のためでもあるので、グレーゾーンですよね。

一度、息子さんがお金（20万ほど）を出して業者が掃除しました。猫も利用者（認知症）も変わりはないので、そうなりますよね。

最終的には、夫の状態が悪化して入院。認知症の妻は息子さんが

説得してショートステイへ。数日は「猫に餌をやりに行かない」と言われていましたが忘れたようです。その後、施設入所になりました。

――猫はどうなったのでしょうか？

猫については息子さんに一任しました。どうされたのかは聞いていません。あえて聞かない、聞かないですよ。ずっと関わっていたら、私たちも利用者と同じようにペットに愛情が湧くんです。本当に、ご本人たちがかわいかったです。だから、ご近所からの苦情もありましたが、ケアマネジャーとして、保健所に電話することはできませんでした。

「どうしてあげたらよかったのか？正しい支援とは何か？」と悩みます。

――利用者からペットの世話を頼まれることはありますか？

このケースの場合は、すでに正しい飼い方はされていなかったの

コラム① 日本で飼われているペットの数は？

一般社団法人ペットフード協会が2021年に行った「全国犬猫飼育実態調査」によれば、犬・猫推計飼育頭数全国合計は、1605万2千頭。

犬（710万6千頭）は飼育率・飼育頭数の減少が続いているが、猫（894万6千頭）は、13年以降、緩やかに増加している。60、70代の単身女性や20、30代の既婚・子あり男性の飼育率が伸びているという。

また、猫の新規飼育者は、20年から増加しており、新型コロナウイルス感染拡大前と比べると、高い頭数となっている。

参考： <https://petfood.or.jp/data/chart2021/index.html>

で、「餌やって」とか「水替えて」とは言われませんでした。介護保険ではペットの世話は許されませんが、でも利用者が快適に過ごすた

（注）複数の専門職が家族の訴え等により認知症が疑われる人や認知症の人およびその家族を訪問し、アセスメント、家族支援などの初期の支援を包括的、集中的（おおむね6カ月）に行い、自立生活をサポートするチーム。（厚生労働省による）

め、ということでは餌を入れたり、水を替えたりしているヘルパーも多いと思います。わずか数分のことなので、決して正しいとは思っていないでしょうが。

事業所によっては、介護保険外のオプション（自費サービス）でペットの世話をしているところもあります。でも経済的に余裕がある人しか使えません。

——利用者が入院されるときなどどうするのですか？

ご近所に鍵を預けて、餌をやってもらったこともあります。近所付き合ひも減ってきているので、難しくなるでしょうね。

ALS（筋萎縮性側索硬化症）の1人暮らしの方が猫を2匹飼っていたケースでは、入院が決まって動物愛護団体に委ねました。徐々に進行し在宅生活が無理になることはわかっていたので、ご本人に「最後はどうする？」と聞くことができました。その方とは信頼関係を構築できていたので、「最後はもらってもらわない」とご自身で決断されました。気持ちを聞くことが大事だと思うのです。

●あるケアマネジャーの経験 その1●

遠方から転居して来られたご夫婦。夫は認知症が進んでおり、妻も軽い認知症。知り合いもなく近所付き合ひもないため、さみしくて猫を飼い始めたところ、60匹まで増えてしまった。

臭いやフンで近所から苦情が出ていたが、本人たちは問題とは認識していない。当時はペットの相談窓口がわからず、1人で悩んでいた。その後、ご本人たちが施設入所となり、遠方のご家族が対応された。

●あるケアマネジャーの経験 その2●

10年以上前のケース。高齢の父親と息子の2人暮らし。他市から引き継ぎを受けた時には20匹いた猫が、その後50匹に増えてしまった。お金がなくて去勢手術ができなかった模様。ヘルパーが用意した食事を猫が食べてしまっていたり、フンだらけで不衛生だったりしたので本人たちの健康のため、地域包括支援センターなどと相談して保健所のお世話になった。息子さんは「ケアマネに猫を殺された」と思われたみたいで、今でもしこりが残っている。

介護支援専門員へのアンケート調査結果から

天津市では、2018年から福祉関係機関と動物福祉関係者による「人と動物の福祉を考える会議」が開催されている（6ページ）。同会議では21年9月に市内の介護支援専門員対象にペットに関するアンケートを実施、75人から回答が寄せられた。以下、簡単にその結果を紹介する。

- 90.3%が「支援先でのペット飼育」について困った経験ありと回答。
介護保険サービスの業務を遂行する上で、業務外である動物の問題も含めて検討しなければならなかったことがわかる。
- そのうち、半数は「どこにも相談しなかった」。
- 困りごとを相談しなかった理由は、「相談先がわからなかった」が36%と最も多く、「相談することを思いつかなかった」24%と続く。
- また、91%が「ペットの困りごとにより利用者のQOLが悪化」と回答。
- 自由記述からは、「ペットを一時的に預かってくれる仕組み」を望む声が多いことがわかった。

全体を通して、「利用者（飼い主）のペットに対する思いを尊重したい」という姿勢と「動物にとっての良い状態を守りたい」という姿勢の両方が感じられ、人の福祉と動物の福祉は切り離しては考えられないことがあらためて浮き彫りになった。



天津市内の介護支援専門員を対象としたペットに関するアンケート調査報告書 2021
人と動物の福祉を考える会議
2022年3月

「スラップ訴訟」って？

うおろ君の
気にな〜る
ゼミナール



まんが ■ ラッキー植松



スラップとは、Strategic Litigation Against Public Participation の略称。法律上の定義はなく、「個人や団体が、公的関心事項に関して政府に請願したり、意見を述べたりしたことを理由にしてその個人または団体に対して提起される訴訟」と説明される。主として公人や大企業などが、公的関心事項について批判的活動・言論を行う市民、労働者、消費者、ジャーナリスト、人権・環境活動家などを威嚇によって沈黙に追いやるため、戦略的に提起する訴訟である。

アメリカ発祥だが、今や世界中で問題となっており日本も例外ではない。元信者とその弁護士との記者会見における発言を理由として宗教団体が提起した名誉毀損訴訟（訴訟計8億円）などが有名である。近年は特に政治家によるスラップ訴訟が問題となっていて、大学教授のツイッター投稿を理由として国務大臣が提起した名誉毀損訴訟などがある。

必ずしも勝訴を目的とせず、訴訟係属により相手方に経済的・物理的・精神的な応訴負担を与えて困窮・疲弊させ、社会的に無力化することを狙ったものである。裁判を受ける権利との調整は必要だが、訴権の乱用として日本でもアメリカのようにスラップ訴訟を早期終結させるための反スラップ法の制定が必要である。

国際人権NGOヒューマンライツ・ナウ事務局長、弁護士 小川隆太郎

ウォロ・バインダー、いかがでしょうか?

ウォロ2年分(12冊)を挟み込めるバインダー(1冊500円+送料350円)です。お問い合わせはウォロ編集部/office@osakavol.orgまで



著者のキャデイさんと初めて会った日(2011年)



上/人気のクリアバッグ
左/建設中の避難所
提供(4点とも) = Gueneu

U35

第33回

いま若手起業家が熱い! これからの社会を担う35歳以下の社会起業家、その若さあふれる「実像」に迫ります。思いを行動に移した若き起業家たちの「物語」には、きっとあなたにも伝わる「熱さ」があります。

Gueneu(ゲヌ) **宮村 暢子**さん

Gueneu (ゲヌ)

東京都新宿区 連絡先 gueneu.tokyo@gmail.com

アフリカの布を使用したアパレル商品や、セネガルをイメージした商品の制作販売を手掛け、売上の10%をセネガル女性の避難所建設支援などに充てている。アパレル業のほか、セネガルのNPO ラパラーブルの助成金申請や、失業者の自立支援のための養鶏業をサポート。ブランド名のGueneuはセネガルの現地語で「出口」を意味する。

10年以上前のベストセラー書籍、思い続けて著者の夢の実現を手助け

2006年、セネガル出身のキャデイ・コイタさんがFGM(注)経験を元に書いた『切除されて』が世界中でベストセラーとなった。

宮村暢子さんは、この一冊がきっかけでセネガルへ向かい、著者キャデイさんが長年実現したかった「女性のための避難所」建設費の1000万円が集まるよう働きかけた人物である。経歴をたどるとドラマティックで、並外れた活力を持つ印象を受ける。しかし、彼女の魅力は実績だけではない。30代の等身大の女性が自分の人生と葛藤しながら起業を決意した話を、詳しく紹介したい。

一冊の本と出会う

幼少期から両親ともに教師の堅実な家庭で育ち、海外への関心は薄かった。転機が訪れたのは07年。大学浪人時代、帰りの電車で本を読みたくなり入った駅の書店で、『切除されて』と出会った。当時は社会課題への関心も特になく、それがどんな本かわからず少女の強い視線の表紙に「怖い」と感じてその場を離れたが、なぜか気になって戻り、パラパラと中身を読み始めた。お清め〴〵をするといって奇麗な衣装に着替えて部屋に入るとカミソリで性器を

切除され、その後強制的に結婚させられるといった過酷な自叙伝だった。読んでいられないような内容であったが、同時に著者のセネガルへの深い愛情が伝わる内容で、一度自分もセネガルに行ってみたいという思いを持つようになった。

その後、大学へ入学。大学4年時の11年に休学してセネガルへの渡航資金をため、4カ月間滞在できることとなった。その間には、なんとキャデイさん本人に会うことができた。書籍の最後に記載された連絡先にメッセージを送ると、家に来てよいと返事があり、そのまま1週間泊めてもらえたという。キャデイさんはFGMやレイプ、強制的な結婚などから逃げてきた女性のための避難所建設を進めており、翌12年には完成させるつもりだと話した。

セネガルの人の温かさに触れ、帰国時にはセネガルがより好きになっていた。その後、知識を得るためFGMの研究を開始。翌年も研究のために渡航し、大学を卒業した。

ライフプランと国境を越える

就職先には悩んだ。NGOという選択肢もある。しかし、社会課題のため

とはいえ、身を削って給与もわずばかりといった働き方をイメージすると萎縮してしまい、またセネガルの避難所への思い入れは強くてもそれ以外の活動に同じ熱量を持てるのか自信がなく、企業への就職を選んだ。

手に職をつけてセネガルでも働けるようにしようとシステムエンジニアをやってみたり、語学力を高めようと外資企業の派遣社員になったり。常に「いつかセネガルに戻った時に役立つように」と仕事を選ぶが、長続きしない。日々の生活の中で、関心が薄れた時期もあったという。しかし、本を読み返すと何度でも原点に戻った。「やっぱり私が応援したいのはキャディさんだ、このままセネガルに関わらなくて後悔しないだろうか」。月日がたち、30歳を過ぎた頃に気持ちが焦った。

一方で「いつか結婚して子どもも産んでみたい」と思い、キャリアとライフプランの両立についても悩んだ。彼女は率直な気持ちを交際相手に打ち明け、相談した。同じ興味関心を持った人ではなかったが「結婚してバックアップする」と背中を押してくれたことがきっかけで、起業してセネガルに関わることを決意した。

決意したら実行あるのみ

その後は、目まぐるしいスピードで活動に取り組んだ。仕事を辞め、まずはセネガルに渡航。セネガルという原点に戻るためだ。早速、衝撃的な事実を知る。最初に渡航した11年時点で翌年完成するとされていた避難所が、完成していなかったのである。宮村さんの再渡航は20年。完成が8年遅れていることになる。

建物の基本構造はできており、落成は近いはずだった。本が出版されたのは06年。各国で翻訳出版され、世界的に有名になった当時は多くの資金も集まり、建設は順調だった。ところが、やがて資金集めが難航。60歳を過ぎたキャディさんは病気がちで活動を精力的に進めることも困難になっていた。

「私が応援したかったキャディさん。あんなに苦労した人生を歩んで、セネガルのために努力してきたのに、夢をかなえることなく亡くなってしまいうことになったら、後悔してもきれない。何をはじめたらいいのかわからないけど、日本で悩んでいた時期のように、悠長にできない。とにかくできることから始めないと——」

そこで、売上の一部を避難所設立の



宮村 暢子さん Gueneu(ゲヌ) 代表

1988年生まれ。大阪出身。書籍『切除されて』がきっかけでFGMに関心をもち大学在学時にセネガルへ渡航。その後日本で会社員を経験した後、2020年に再度渡航。同書の著者の夢であった被害女性の避難所設立が実現していなかったことにショックを受け、スポンサーとなるべく20年4月にGueneuを設立。現在も支援を続ける。一児の母。

資金にするためのアパレルブランドを、帰国からわずか1カ月半後の20年4月に設立。避難所設立にはあと1000万円が必要で、アパレル事業だけでは足りない。使えそうな助成金を片っ端から調べ、結果的に外務省の助成金を1年がかりで獲得。この間に子どもが生まれ、育児と両立しながらだった。ようやく1000万円の調達を終え、建物は22年中に完成予定だ。現在は避難所を無事にスタートさせ、継続的な運営をかなえるため、引き続きキャディさんのスポンサーとして活動を続けている。

「自分の経験から、チャレンジのハードルはもつと低く感じていいんじゃないかと思っています。すごい起業家になって資金を集める、とか、一生かけて寄付し続けなきゃいけないとか考え過ぎず。たとえ1、2年の寄付しか続けられなかったとしても、その団体にとっては1、2年分の資金になると今は思います。やってみると、後からやらなければならないことがたくさん見えてくるのですけどね。今後も自分ができることをやっていきたいです」と、宮村さんは明るく笑う。

編集委員 稲田千紘

(注) アフリカや中東などの一部地域で行われている女性器切除の慣習で、地域の伝統として実施されている一方、女性の健康・精神面での被害が問題視されている。

「カフェ・カワセミピレット」

工 コロジエをテーマにしているカフェ・カワセミピレットは、JR中央線西荻窪駅から徒歩15分ほどのところにある。善福寺川と大家さんが管理する庭に隣接し、窓から見える景色は緑豊かだ。フードメニューは野菜主体で、ビーガン向けの食事も提供している。

ここではカフェの営業だけでなく、さまざまな環境活動も行っている。エシカル雑貨販売や、環境問題の図書コーナーがあるほか、店内は極力プラスチックフリーを心がけている。常連客の空手の師匠が中心となった「ゴミ減らし隊」は、ゴミ拾いをするだけでなく空手の護身術も学べる活動だ。「コンポスト隊」は、各家庭でバッグ型コンポストを使って生ゴミを堆肥化し、完成したものを学校や駅前の花壇などに活用してもらい、地域の循環を生み出そうと試みている。

カフェでは、「西荻大作戦」と題して、継続的に環境問題について取り組み、脱プラスチックやゴミゼロに取り組みキャンペーンを展開してきた。

このカフェができたきっかけは、高齢の建築家夫婦を描いた映画「人生フルーツ」。当時、ブランシャール明日香さん（店主）と近所に住む大家さん、知人の建築士さんが、映画に感動し想いを共有したことで、プロジェクトが立ち上がり2年越しで開店した。「一人の幸せを生み出せる場所にしたい。大家さんと建築士の方の想いも背負ってやっている。色んな人たちが行き交う家族の延長みたいな関係を築けていると思う」とブランシャールさんは話す。

今後は自治体と連携して「気候市民会議」を設立したいという。折しも杉並区では、ヨーロッパのNGOで公共政策に取り組んできた岸本聡子区長が誕生した。これからのカフェがどのような場所になっていくか楽しみだ。

編集委員 山中大輔

カフェ・カワセミピレット

東京都杉並区善福寺1-30-9 電話 03-6884-5507

ランチ&カフェ営業時間

土～火曜11:00～17:00

レッスン・イベント

木・金曜(スケジュールは公式サイトイベントページを参照)

水曜定休 8月・年末年始休み

カフェ・オリジナルソング

「ミニシバリズム」

YouTube で公開中



作詞作曲：
ブランシャール明日香
Song by: Momocurly



右/店主のブランシャール明日香さん
左/エシカル雑貨や環境に関する書籍が並ぶ店内



ごみ収集とまちづくり 清掃の現場から考える地方自治

藤井 誠一郎 著
朝日新聞出版社、2021年8月
1650円 (税込)

コロナ禍で、医療・福祉関係者らとともに「エッセンシャル・ワーカー」として注目を集めた清掃従事者。感染者のいる施設や住居から排出されるごみをリスクと背中合わせで収集する清掃従事者の様子がたびたび報道されたせいか、住民から感謝の意を伝えられることが多くなり、これまで日陰にあった清掃事業が一躍表舞台に現れたように見える。

著者は清掃従事者にスポットライトが当たることで、私たちにとって必要不可欠な清掃事業をいかに維持し安定的にサービスを提供していくのかといった議論に発展するこ

とを期待した。だが現実にはコロナ禍が長引くにつれ、清掃事業への住民の意識や関心は次第に薄れてしまったのではないかと指摘する。

大学で地方自治や行政学を研究する傍ら、清掃の現場に身を投じて清掃従事者とともに汗を流した著者は、多くの住民が今後のあるべき清掃事業について思考を巡らせ、学習を重ね、住民同士が議論していくような現場目線の地方自治が展開されていくことを切望し、清掃事業の実態を知る一助にと本書を書き上げた。

具体的には、劣悪な労働環境のなかでも誇りをもって仕

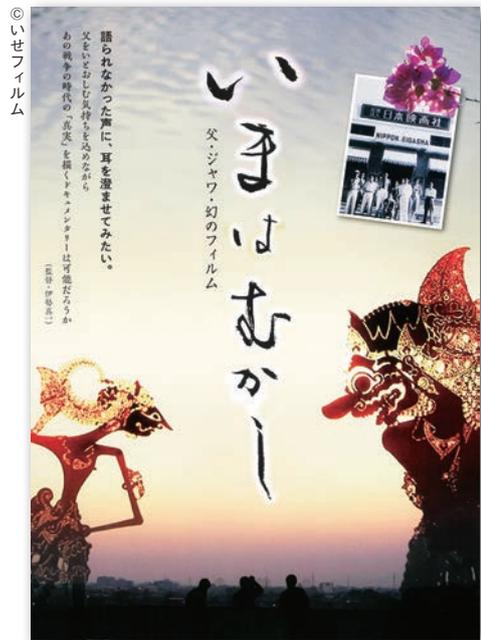
事する人がいるごみ収集の現場、それにもかかわらず自治体の行政改革の一環で進められていく人員削減や民間への委託化。コロナ禍で清掃職員への感謝の意が伝えられる一方、これまで詳しく伝えられてこなかった清掃差別の実態。男性中心の職場で活躍する女性職員、住民と行政の協働による繁華街の美化、さらには産業廃棄物の概要とそこで推進されているDX（デジタルトランスフォーメーション）まで視野を広げ、内容は多岐にわたる。清掃事業について体系的に全体像を把握できる渾身の書である。

編集委員 阿部 太極

本 作の監督である伊勢真一さんの父・伊勢長之助さん（1912～1973）は、映画の構成・編集者として戦後の東京裁判の映画をはじめ、多くの名作を遺してきたと、周りの映画人の先輩たちから話を聞いていた。しかし、彼が戦時中にインドネシアに渡り、プロパガンダ映画の制作に関わっていたという履歴は、本作を観るまで知らなかった。亡き父が何を考えて映画を作り、戦時の世の中をどう生き抜いてきたのか。この映画は、インドネシアでの父の記憶を息子が追想する作品である。劇中、真一さんがまだ3歳の頃に父に抱かれたツーショット写真が登場する。父は息子に戦時中の体験をあまり語らず、この後から家に出て行ってしまっ

たという。真一さんの個人的な体験から発しているながらも、インドネシアでの足跡を訪ねていくと、当時の撮影所跡地や、幻とされていた国策映画フィルムなどが発見されていく。父が語らなかつた記憶を穴埋めしながら、しかし埋まりきらない、語られなかつた市井の人々の戦争の記憶が水紋のように作品に漂っているようだ。劇中には本人も映り込んでいて、「父親が多くを語らなかつたことがよかった」という言葉が印象的だった。かつての面影のない場所、現地の人やフィルム、当時の建物などを手がかりに父を追想する真一さんの心が読み取れたような気がした。観る者にも、戦争加害者として、映画人として、

沈黙と想起を繰り返しながら受け渡されていく戦争の記憶



監督：伊勢真一
製作・配給：いせフィルム
2021年カラー | 88分 | ヒューマンドキュメンタリー
9月2日 大阪・阿倍野市民学習センターで上映予定
詳細は <https://hdf.jp/news.html>

今月の作品 「いまはむかしー父・ジャワ・幻のフィルムー」

●今月の館主

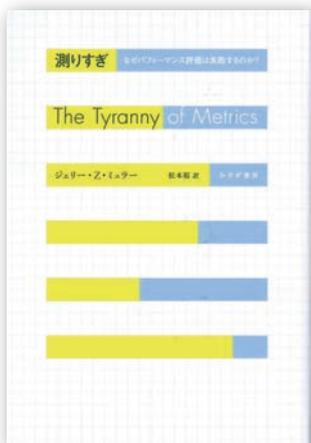
いまいともき
今井 友樹

1979年岐阜県生まれ。日本映画学校（現・日本映画大学）卒業後、日本各地の基層文化を映像で記録・研究する民族文化映像研究所に入所。所長の姫田忠義に師事し、映像制作に関わる。現在、株式会社工房ギャレットの代表を務める。



イラスト：杉浦 健

父としての長之助さんが浮かび、さまざま感情が湧き起こっては入り混じるのを感じた。そして本作の制作には真一さんの長男と長女も参加している。父とはまた違う感情を抱きながら、記憶を受け渡されていく様子が垣間見えた。真一さんの作品群の多くは、作り手自身が映画に身を委ねながら作られているという印象を受ける。相手が笑えば一緒に喜ぶし、相手が立ち止まれば一緒に悩む、監督は伴走者のようだ。先入観はないし、誘導はしない、恣意的でもない。彼の作風の背景には父親からの反動もあるのかもしれないと思った。



測りすぎ
なぜパフォーマンス評価は失敗するのか？

ジェリー・Z・ミュラー著
みすず書房、2019年4月
3300円（税込）

民 間企業だけでなく、学校や病院、警察でも、パフォーマンスを上げるためにさまざまな指標が開発され測定されている。実績を数値で測定し公開して活用するやり方は、多くの場面で受け入れられている。しかし、実務では「こんな指標に意味があるのか？」「無駄な仕事が増えただけ」と思っている人も多いだろう。本書は、標準化された測定を使う際に意図せず起こる好ましくない結果から、「過剰な測定」や「測定基準への執着」の問題を提起し、分析する。測定基準への執着がもたらす課題として、著者は学校、医療、軍などのケーススタ

ディから「測定されるものに労力を割くことで、目標がずれる」「短期主義の促進」「従業員の時間にかかるコスト」「効用の逡減」「規則の滝」「リスクを取る勇気の阻害」「イノベーションの阻害」「協力と共通の目標の阻害」「仕事の劣化」「生産性のコスト」など多くを挙げる。これだけの課題があるのに、なぜ測定は「改善」と結びつくのだろうか。著者は、測定のあらゆる場面で「説明責任（アカウントビリティ）」が求められることを指摘する。そして、そこに含まれる「レスポンスビリティ（責任を取る）」と「カウント（測定できる）」という二つの意味が、

測定基準への「執着」につながると言うのだ。一方、「測定」そのものにも「一番簡単に測定できるものしか測定しない」「成果ではなくインプットを測定する」「標準化によって情報の質を落とす」「上澄みすくいによる改竄」「基準を下げることで数字を改善する」「データを抜いたり、ゆがめたりして数字を改善する」「不正行為」などがしばしば起こる。対策として、本書には「測りすぎない、ためのチェックリストもまとめられている。測定基準に執着していないか、立ち止まって考える機会を与えてくれる一冊だ。編集委員 竹内 友章